映画評

１　一般映画

『妻二人』

中村　藤生

１９６７年４月　大映　９４分

監督　増村保造

脚本　新藤兼人

キャスト　道子・若尾文子　健三・高橋幸治　順子・岡田茉利子　章太郎・伊藤孝雄　昇平・三島雅夫　利恵・江波杏子　美佐江・長谷川待子　淳吉・木村玄

２０１５年は、私にとって興味ある新作上映が少なく、「若尾文子 青春」と銘打った角川映画企画の作品を中心に観ました。若尾の一ファンであることから、おのずと関係深い重要な監督 増村保造作品に強い興味を抱いています。

若尾が出演の増村映画はよく知られているように２０作品があり、１９５７年から １９６９年間の１３年間に公開されています。昨年から今年頭に観た中から『妻二人』の感想を書いてみました。

原作のパトリック・クェンティンのミステリーをベースに人間の欲望・愛憎を容赦なく速度と強度をもって迫っていく。登場する四組の男女はメビウスの帯で繋がれた中で、若尾と岡田の二大女優を軸に展開していく。

道子は母と早くに死別したが、今は父昇平と共に主婦向けの啓蒙的出版社を切り盛りしている。その出版社を小説家志望の健三は恋人順子の紹介で訪れる。原稿はにべもなく返されたが道子の口添えもあって、社長昇平に入社をすすめられる。その後、道子と健三の間は急速に進んでいった。

順子は恋人健三が小説家になることを共に夢見て支えてきたが他の女と結婚する裏切りに合う。しかし、夢覚めぬ順子は、うだつのあがらぬ年下の若い小説家志望の章太郎が健三の代替だった。ここから道子の妹利恵を巻き込んで四組の男女は思わぬ事件からミステリアスに翻弄されてゆく。

まず順子の紹介で章太郎が道子の出版社を訪れる。そこに居合わせた道子の妹利恵は章太郎に好感を持ち、結婚を考えるまで進む。健三は社の事業副部長であり、過去を知られている章太郎は不都合な男だった。また道子は章太郎に不快感を抱いていた。

章太郎を身内にすることを阻止したい道子は、大阪出張の日に妹利恵との結婚を破棄すれば百万円を渡すと掛合う。その夜、百万円の小切手を持って章太郎のアパートを訪れる。話はつかず、金はとった上に道子の父昇平が社員美佐江と不倫関係にあり、美佐江の夫淳吉は同社員で使い込みを。また

夫の健三に愛人がいると逆に揺さぶった。そして動揺する道子に襲いかかった。必死に抵抗し、誤って殺してしまった。そのあと一見何事もなくその場から大阪へ立った。

数日後、殺人現場に残された指輪が証拠となり順子が逮捕される。その指輪は昔健三が母のかたみを順子にプレゼントしたものだった。新聞で知った健三は息をのむ。章太郎が殺された同時間に順子と健三は別れ話で逢っていたのだ。結末は道子のアリバイが崩れ、順子はこんどこそ健三から離れて東京から去る。

本作品は仮面を被った人間が欲望を遂げる代わりに自らがその代償を受ける生きざまを描いたものと感じた。まことしやかな仮面をつけた人間が集合する偽善的出版会社を舞台としている。社長の父は早くに妻を失くし、二人の娘のためにも後妻を迎えていないが、愛人の肉体を自分の逃げ場所としている。長女道子は父の出版会社を居場所としているが仮面的存在感ではなかったろうか。一方芽の出ない文学青年健三は順子に支えられて売れない小説を書いていた。その後離れていた二人はサラリーマンと雇われマダムの姿で場末のバーで偶然再会する。その時、順子は健三との夢の続きを章太郎にみることでしか生きていられなかったのだ。ここに見られる人間の愛情を炙り出す表現は、人が持つ性（さが）を放出させている。

監督増村保造は第１作『くちづけ』１９５７年から女性の体内から発する火を描くことで、生々しい人間をスクリーンに誕生させる。そこが唯一無二だとしていると感ずる。

登場する仮面的人間の中で順子だけは愛がすべての女を生きている。深く愛に生きる順子を演ずる岡田茉利子が最も存在感を放っている。『秋津温泉』１９６２年で観た滅びゆく旅館の娘新子と重なった。